

新米教授体験記



角所 収*

はじめに

随筆を書くようにとの依頼があり、気軽にお引受けたしもの、過去の例文を拝見しますと、論文と言ってもいいようなものばかりです。退官した現在、論文調から離れて、一興かとも存じ、気軽に勝手な体験記を書いてお茶を濁すことにしました。悪しからずお許し下さい。

* * *

私が教授になりました時、教授学とは何だろうかと、経験豊かな方々を訪問しまして、御意見を伺った事を思い出します。

先ずシニアの教授の先生方ですが、

1. 「何よりも学問分野の将来について、先見性を持つべきです。学問分野が流行らなくなつては、どうにもならんよ。学際的研究にとりついて、それを確固とした学問分野に育成することですね。自分の先生の続きをやっていては、大したことにはなりませんから」といわれた未来予測派の先生。
2. 「研究は、所詮人だよ。人物鑑定眼を養って、優秀な人物を採用するのが先ず肝要ですね。人事の問題に気を配っておれば万事巧くゆくよ。まあ着任当初は、残留者もいることだし、研究室をよく纏めて、全員にやる気を起こさせることが先決ですね」と大学における人事管理の重要性とその難しさを強調された先生。
3. 「大先生ほど、一将功成つて万卒枯るだよ。教授の評価は教授個人の業績評価だけでは不充分なんだが、どうもこの様に評価される傾向が

ある。これは誠に苦々しい。後進の育成が大切だ。三人教授を作り給え。そうすればパワフルな研究グループが出来るし、自然と大先生と言われる様になりますよ」

と言われた後進育成派の先生。

4. 「学問も、芸術も、事業も皆人情の為にするという言葉があるが、自分の人間を作るのが第一だよ。人間として尊敬出来ない人間に誰がついてくるものかね。狭い学問分野の専門的能力しかない教授の下にいる者は災難だ。自己顕示慾の塊だからな」

と言われた人生哲学派の先生。

5. 「何時までも、助手の様に論文だけを仕事と考えて貰っては困るね。それが本当に役に立つものなら、特許にきなさい。第一、研究費に困らなくなるし、企業も喜ぶよ。特許こそ本当に社会に役立つものです。大河内賞なんかいいですね」

と言われた実学派の先生。

6. 業績派の先生には色々レベルがあった。

「サイテーション・インデックスという本がある。あれにしょっちゅう引用されるようでないといけませんよ」

「学会の論文賞を度々貰うことですよ。そりゃあ、なんたって。権威のある学会ほどよろしい」

「世界のピークを目指すことです。学会も国際会議での発表が主になるようにね。関西支部長なんて、やめときなさい。そんなことやってるから、研究の時間がなくなって、時代後れするんです」

「学士員賞を貰うことです。それに文化勲章がありますね」

「ノーベル賞を目指すことです」

7. 具体的目標設定派の先生は、

「学術会議のメンバーになることです」

*角所 収 (Osamu KAKUSHO), 元大阪大学産業科学研究所, 電子科学部電子機器部門教授, 大阪大学名誉教授, 工学博士, 情報工学

「科研で大きい金を貰うことですよ。そう簡単には貰えませんから、目立ちますよ」

「学内、学外の委員会で真面目に勤めることですね。特に学生生活委員会等で活躍しないと行政的能力を認めてもらえません。もちろん部局長にはなれませんね」

「院生を多数受け入れるのが、先決です。そうでないと、活発な研究活動は出来ません。アイデアはあっても、どうにもなりませんよ。院生の数は、教授会に院生経費のリストがでますから、直ぐ数が判るんです。学生、院生を含めて40名を越える様にならないと駄目ですわね」

8. クレーム派の先生は、

「昼日中から助手が秘書とテニスなんかしない様にしつけるんですわね」

「11時に来て、5時に帰る職員がいる様では困るね、他の研究室にも悪影響があるし。それに、車庫で自分の車を洗車しているのがいるね」この他にも、20位の御教示を記憶しております。

ある先生は、ホット・ウイスキーを、ある先生は茶菓を奨めながら、またある先生は北の飲み屋で、各人各様の独得の弁舌を振られました。

これを聞いて、当時は、「これはたまらない、どの一つでも難しいのに、これでは、いくら身体があっても足りない」と思いました。

また企業におられる方から、

「気をつけないといけないよ。大学の先生は斜めに生えだしたらどこまでも斜めに伸びて行くからなあ。企業では考えられないことだよ」

「基礎研究 (Basic Research) と開発研究 (Strategic Research) のどちらでもない、中途半端な研究はどうだろうかねえ」と言われた。

これには、研究面に関して、大学の先生には誰も面と向かって批判はしないかも知れないが、色々な能力がバランスしていないので、会社なら勤まらない様な、プライドだけは高いが、研究テーマをジャステイファイしにくい先生もいるねえという響きがありました。

* *

さらに、追い打ちをかける様に、ジャーナリストの方からは、

「日本の大学はゲリラ戦しか出来ないのではないか。戦国時代の名乗りを挙げて切り合っていた時の感覚がそのまま続いているねえ」と言われた。

研究とは元来、個人の創造性に基づくものであることは、基本的には変わらないのですが、アメリカ等では、研究者の個人意識が強いにも拘らず、研究管理にも力が注がれ、高度な組織的研究の成功例も数多いという主張の様に聞こえました (DARPAのサポートもあり、一概に同列には論ぜられないと思いますが)。

* *

これら三つの方面のどの主張にも、誠にもつともと思われる点がありました。

しかし、言うは易く、行うに難いのは世の習いでもあります。

先輩の経験を活かすと言うことは、学問的にも大変難しい問題です。それは実際の経験者程経験した事柄に関するモデルが精細に構築出来ていないからです。

角所研の学生は、私に奨められまして、故松下幸之助相談役の「日々の言葉」とか「道は無限にある」を読んでいます。精細なモデルを構築し、シミュレーションをして検討しないものですから、仲々自分の身についた、つまり、実際に適用可能な知識にはならない様です。

この問題を、仮に経験学習 (AIの分野で研究されている経験による学習ではない) と呼ぶことに致しますと、これを効果的にする方策は何かということになります。

経験学習効率化のための最大の問題は、対象モデル構築の精細化への努力と、経験を学習する場合の学習の時間軸の加速だと思われます。

教授学関係の経験学習は、私自身の問題であり、色々試みました。

その結果、採用した講座運営上の方法を、紙面の関係上、二つにつきましてお話致します。一つの例題として、若き後輩の方々に参考になれば幸いです。

* *

何事にも調和に重点を置いてやっていくということです。

その一つは人間関係における調和です。

この調和をとるやり方は、色々あろうかと思いますが、私は精神年齢を高くすることだと考えました。研究室のスタッフは勿論、学部生に至るまで、この努力をして貰わなければなりません。これは極めて大切なことだと思っています。

精神年齢が高い人とは、生物学的な年齢は若くても、人の立場が判る、自己中心的でなく、万事につけて色々なファクターを考慮できる人ということなのです。

これは簡単な様ですが、案外難しいものです。少し抽象的ですので、具体例で説明します。

学会の研究会一つをとりあげてみても、教授が現地校になるのを引き受けて来るのはいいが、会場の設営や応対全般に涉って、実行部隊に黙って任せられる状態にはそう簡単にはなりません。他大学での研究会でも、「もうちょっと何とかならないものか」と感じることは珍しくありません。外国での国際会議の場合も同様です。

また学会でマイクがないのに、か細い声で、OHPが片側の出席者には影になる状態で話す人も多いです（同感される先生も多いと思います）。

私の所属している電子情報通信学会では、このような状況を見かねて、大先生が「学会講演の仕方」の手引書を書かれ、毎回講演者に配布しておられます。そのために、この学会での講演は、他の学会での講演と較べると、講演のマナーに関する限り、効果が上っているという状況です。

研究がまともに出来るからといって、他の事的能力に関しては安心は出来ないことを、この事例がよく証明しています。

しかし、何事も、意識的にやっているのであればそれでよいと私は思っておりますので、講演の仕方の改善に力を注ぐべきかどうかは、価値観の問題であり、一概にどちらのやり方がいいとは言えないでしょう。

問題は、こと研究会の会場の設定とか講演の仕方に関する事に留まっておれば（本当はどうか分かりませんが）、影響は少ないかも知れ

ません。ところが、こういう人は、生涯計画（私はライフ・アセスメントと呼んでいます）もずさんなことが多い様に思います。これが、問題なのです。

この解決法は、当人が気付かなかったファクターをとりあげて、こういう損失が生じたと具体的に説明し、この損失の波及効果はこの様なことになり、君が考えている程小さくはないと指摘することを、何度も根気よく繰り返す外はないようです。

この問題は、最近ではピープル・ウェアの問題と呼ばれており、学問的にも論議をされています。

もう一つは研究面での調和ですが、アイデアとファシリティとマンパワーのバランスのとれた研究をするように努めると言うことを説得することです。若い人の場合には、この外にさらに境界条件も加える必要のある場合もあります。

これらがマッチしていないと、泡沫的研究になり易く、まともな研究が出来ない様に思われます。

この問題も、先ほどの話と同様、抽象的、概念的なことを言っても片付きません。この問題解決の為には、失敗例を取り上げて（自分の所の例だけを取り上げていてはダメージが大き過ぎますので、失礼ですが他所の例をも借用もするとした具合に）、話す方と聞く方の問題対象に関するモデルが接近する程度に、具体的に説明します。そうでないと、他山の石とすることは出来ないからです。

おわりに

枚数が尽きた様ですから、この辺で終わりにさせて戴きます。

退官した身の気易さから、本誌にとって必ずしも適当かどうか分からない雑文を書いたに過ぎません。差障りの御座いました場合には、御寛恕戴きたいと存じます。